

寛政4年 雲仙・普賢嶽大焼

寛政3年(1791)の秋から翌4年の春にかけて、一連の地震活動、火山活動が、島原半島を西から東へと横断するように移動、発生していった。

まず、旧暦10月から11月にかけて、西の小浜村で地震が頻発、落石により2人の死者がでた。

年が明けると、しばしば山の鳴動が聞かれたが、ついに1月18日、雲仙・普賢岳の噴火が始まった。はじめのうちは小規模の噴火だったが、2月6日からの新たな噴火とともに、溶岩が流出し始め、北東側の穴迫谷をゆっくりと流れ下った。谷を見下ろせる場所には、多くの人が集まり、溶岩見物を楽しんだという。

2月29日には、6日の噴火地点よりさらに200mほど上の斜面で新しい噴火が始まり、溶岩を流出した。この溶岩流も穴迫谷へ入り、前の溶岩と合流して谷を流下した。溶岩流の先端から岩の崩れ落ちる音が激しく、まるで雷鳴のどろろくようであったという。閏2月29日には、先端は、最も近い千本木の集落から500mほどの所にまで迫り、そのあたりで前進を停止した。

火山活動が下火になったかわりに、3月1日の夜から、島原半島の東部で地震が頻発し始めた。地震は、はじめの1週間ほどがとくに激しく、各所で山の斜面が崩れ、地割れを生じた。島原城の石垣や石橋が崩れ落ち、民家にもかなりの被害がでた。ひっきりなしの地震に恐れをなした島原の人々は、近郷の身寄りなどを頼って避難していった。この群発地震は、旧暦の3月1日に始まったことから「三月朔の地震群」と呼ばれている。

群発地震は日を追うにつれ静まっていたため、3月のなかばごろからは、避難していた人々もおおい島原の地に帰ってきた。だがこの間に、島原一帯では、各所で地下水の異変がみられた。地震によって生じた地割れの末端から、とつぜん清水が湧き出したり、すでにある湧き水の水量が急に増えたり、反対に涸れてしまった例もある。振り返ってみれば、これは次に起こる大変災の前ぶれだったのである。

「三月朔の地震群」が起き始めた日から、ちょうど1か月を経た4月1日(新暦5月21日)の夜、強い地震が2回島原一帯を襲った。この地震の衝撃によって、眉山の山体が大崩壊を起こしたのである。崩壊した山の部分は、瞬時に大規模な岩なだれとなって有明海に落ちこみ、大津波を発生させた。津波は、島原の城下町はもちろん、有明海沿岸から天草諸島を襲い、大災害をもたらした。大津波による死者の総数は15,000人にも達したと伝えられる。島原とは海を挟んで対岸にあたる肥後の沿岸だけでも5,000人が津波の犠牲になった。「島原大変肥後迷惑」という言い伝えは、この故事によって生まれたものである。

この古絵図は、寛政4年(1792)3月、雲仙・普賢岳の噴火の模様を、北東麓の神代(こうじろ)村から描いたものである。山頂部での噴火とともに、山腹に上がる火は穴迫谷を流下する溶岩流を表しているものであろうか。

絵の部分は、まだ「島原大変」の起きる以前の状況であって、画面左側には島原城が描かれており、左端に『城下町残不退散』とあるのは、「三月朔の地震群」によって、住民がみな他所へ避難をしてしまったことを意味するものであろう。

しかし、左上に書かれている説明には、普賢岳の噴火で溶岩が流下する様子、3月1日からの地震が7日ごろまで続いて被害をだしたこと、近国から数百艘の舟が救援にかけつけてきたことなどが記されたあと、「又々當月朔口海底ヨリ火焼出汐湯トナリ国中大洪水トナリ島原近辺ハ勿論肥後ノ領分モ村數十ヶ村流ル」とあるのは、眉山崩壊による津波災害を描写したもので、「島原大変」が起きてから後の記述である。なお、ここにいう「當月朔日」とは、大變の起きた4月1日をさしているのであって、つまりとところ、3月に描かれた噴火のスケッチに対して、大變後の4月に注釈をつけたものと推定される。

寛政四年子三月萬原温泉嶽内普賢嶽ヨリ
 大焼三里テマヘ神代村ヨリ遠見ノ圖

此所三月朔日ヨリ燒出大震動大石
 崩敷百雷一時ニ落方如ク毎日ケケ
 八九丁宛合間ヨリ廿三テ燒下リ燒
 御役全組宛出張殿様御前ヘ注進
 有之燒場ヨリ城下二里三月朔日ヨリ
 御城天倉石垣外神社佛閣鳥井
 石燈籠不殘崩城內ニ五ノ所大焼
 水涌出三月朔日ヨリ七日ヲ殊ノ外
 大震動大石及出先代未聞ナリ萬
 原大守様山田大庄屋御退城下町
 銘々方々引越儀近國ヨリ助々卅
 數百艘入込相揃ハ一又ニ高月朔日
 海應ヨリ火燒出以湯トナリ國中
 大洪水トナリ萬原近辺ハ勿論肥後ノ
 領介モ村教十村流ル

是ヨリ南天草山萬



寛政4年子萬原温泉嶽内普賢嶽ヨリ大焼三里テマヘ神代村ヨリ遠見ノ圖／藤井重夫氏蔵

島嶼

島嶼

普賢山嶽

國見山嶽

白甲嶽

他山嶽

吾妻嶽

除左三門
十二燒

坂本村

九尾山

神代子

長濱

多子村

